

厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等政策研究事業(難治性疾患政策研究事業)
分担研究報告書

圧迫性頸髄症手術前後の転倒による症状悪化に関する多施設前向き研究

研究分担者 竹下 克志 自治医科大学整形外科 教授

研究協力者 木村 敦

研究要旨 OPLL 症例を含む頸髄症患者における手術前後の転倒と、それに伴う自覚症状悪化の発生頻度に関して、後ろ向き研究に引き続いて前向き研究を実施している。手術予定の頸髄症患者に自記式の調査票を配布し、術前から術後1年までの転倒の詳細と QOL の推移を調査している。全国 8 力所の協力施設より平成 29 年 10 月までに計 161 名の患者が登録されている。平成 30 年 4 月に術後 1 年以上経過した症例の診療情報やアンケート結果の回収を開始し、同年 10 月までにデータ分析が完了する予定である。

A．研究目的

頸髄症患者における術前後の転倒と、それに伴う自覚症状悪化の発生頻度を、前向き調査によってより正確に明らかにすること。

B．研究方法

平成 27 年 10 月に本学において研究計画に対する倫理委員会の承認を得て、計画書と調査用紙を協力施設に送付した。各施設における倫理委員会の承認後に、同意が得られた患者に調査票を配布し、術前から術後 1 年の期間でデータを収集している。

C．研究結果

平成 29 年 10 月までに全国 8 力所の協力施設より計 161 名の患者が登録されている。平成 30 年 4 月に術後 1 年以上経過した症例の診療情報やアンケート結果の回収を開始し、同年 10 月までにデータ分析が完了する予定である。

D．考察、

本研究によって、頸髄症手術患者の転倒とそれに伴う症状悪化の頻度に関して、より正確なデータが得られることが期待される。また、後ろ向き研究では OPLL 患者が頸椎症性脊髄症患者に比較して有意に転倒が多い理由に関して十分な解析ができなかったが、本研究ではより詳細な分析が可能となる見込みである。さらに症状悪化の危険因子と予防策に関しても分析を行いたい。

E．結論

頸髄症手術前後の転倒による症状悪化に関する前向き研究を実施し、現在データの収集と分析を行っている。

F．健康危険情報

総括研究報告書にまとめて記載

G．研究発表

1. 論文発表

1. Kimura A, Takeshita K, Inoue H, Seichi A, Kawasaki Y, Yoshii T, Inose H, Furuya T, Takeuchi K, Matsunaga S, Seki S, Tsushima M, Imagama S, Koda M,

Yamazaki M, Mori K, Nishimura H, Endo K, Yamada K, Sato K, Okawa A. The 25-question Geriatric Locomotive Function Scale predicts the risk of recurrent falls in postoperative patients with cervical myelopathy. J Orthop Sci. 2018;23(1):185-189.

2. 学会発表

1. 頸髄症手術前後の転倒による自覚症状悪化に関する検討 - 多施設後ろ向き研究、
木村 敦、白石 康幸、井上 泰一、遠藤 照顕、竹下 克志、日本整形学会、仙台、2017/5/18 .
2. 頸髄症術後患者のロコモティブシンドロームと転倒の関連に関する検討
木村 敦、井上 泰一、竹下 克志
日本リハビリテーション医学会、岡山、2017/6/9 .

H . 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

1. 特許取得

なし。

2. 実用新案登録

なし。

3. その他

なし。